



Title	中世バラッドThe Hunting of the Cheviot or Chevy Chase試訳
Author(s)	金山, 崇
Citation	大阪外大英米研究. 1980, 12, p. 37-44
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99048">https://hdl.handle.net/11094/99048</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 中世バラッド *The Hunting of the Cheviot* or *Chevy Chase* 試訳

金 山 崇

十一世紀以来、豪族が、又後には彼らを通して国家同志が、頻繁に紛争を起こしていたイングランドとスコットランドの辺境地方は、いわゆる border ballads を多く生んできた。中でもその成立が十五世紀とされ、中英語 (Middle English) のイングランド北部方言で書かれ、*The Hunting of the Cheviot*<sup>1</sup> の名で今に伝わる ballad はその最も著名なものである。十世紀アングロサクソンの戦争詩 *The Battle of Maldon* を想起させる趣きも持ち、素朴ながら心打つこの作品が、当時より長くもてはやされた様子は Child や Wheatley の解説にうかがえ、又十六世紀 Sir Philip Sidney、十七世紀 Joseph Addison<sup>2</sup> ら文人に与えた感動は文学史<sup>3</sup> に言及されるところである。なお、歴史上の事実は定かではなく、矛盾も含んで<sup>4</sup>いることを付記しておく。

以下は、先に「中世ロビン・フッド小伝抄訳」で述べたと同様の主旨により、名は知られても実際には広く親しまれていないと思われるこの ballad を、散文によってではあるが、翻訳したものである。底本には、F. J. Child : *The English and Scottish Popular Ballads*, vol. III, Dover Publications, Inc., 1965 (原著は 1888 年刊行) を採り、更に 1765 年発行の Thomas Percy : *Reliques of Ancient English Poetry*, vol. 1, Dover Publications, Inc., 1966 (1886 年刊行され H. B. Wheatley の序・注などがつけられたもののリプリント) と J. Kinsley : *The Oxford Book of Ballads*, 1969 を参照した。

各 Stanza は通常四行から成り、次のように a bab と押韻する。

54. For Wetharryngton my harte was wo,  
that euer he slayne shoude be;

For when both his leggis wear hewyn in to,  
yet he knyled and fought on hys kny.

1. ノーサンバランド<sup>5</sup>に出づるパーシー、彼神明に誓いぬ。必ずやこの三日がうちに、チェビオットが山<sup>6</sup>に狩りをせん。剛勇ダグラス、はた共に在る者ら、皆何するものぞ。

2. チェビオットが四方に、太りまされる赤鹿が牡数々仕留め、獲物もて引き揚げん。といえは剛勇ダグラス応えて誓う。その狩りや必ず阻まん、余が力にかけても、と。

3. さてパーシー、勇壮屈強の弓勢千と五百、大人数を引き連れバンバラ<sup>7</sup>より出で来たりぬ。三つの所領<sup>8</sup>よりこれら選り抜かれし者なりき。

4. これはさる月曜の朝まだき、かの高きチェビオットが丘にて始まりし事なり。未だ世に生まれざる人の子の、それを悲しむもむべなるが、今更ながら口惜しき事にこそ。

5. 勢子ら鹿の眠り醒まさんと、森を四方へ駆け廻りぬ。弓とる者ら、光る太矢尻の矢つがえ、戦<sup>くさ</sup>の草原に放ちぬ。

6. この時鹿共、森うち廻りて四散、狼の犬また獲物仕留めんと、木立ちがうちを矢の如く突っ走りぬ。

7. こはさる月曜の朝方、高き丘チェビオットにて始まりし事なり。正午<sup>ひる</sup>近くに及び、太りたる赤鹿が牡百頭、骸となりて横たわれり。

8. 狩りの首尾知らせて角笛、戦の草原に響くや、その音目指し人諸所に集まれり。さてパーシーも、肉の切り分け見んものと、獲物が許へと赴きぬ。

9. パーシーは語りぬ。さきに此の日余とここにて見えんとダグラス誓いを立てぬ、されどその言葉違えん事、余重々承知しいたり。かくパーシー、声を大に罵りぬ。

10. されどいよいよ、ノーサンバランドの従者ひとり、真近に目をやるに、剛勇ダグラス、大人数を引き連れ迫る姿に気付きたり。

11. 槍に槍鉞<sup>まさかり</sup>、はた劔持てる出で立ち、見るも力強き様にて、勇気も技もこれ

らにまさる豪の者、キリスト教が世のうちに無し。

12. その勢い、過つとも二千は下るまじ、勇武の槍兵にして、ツイード河<sup>9</sup>の水遡りてテビオットが河の谷間<sup>10</sup>の領分へと運ばれしものなり。

13. 鹿の肉切り分けるをやめよ、パーシーは叫びぬ。心して汝らの弓しかと手入れせよ。母の背に負われしより今に至るまで、かかる大事に汝ら巡り会いしことは無きものを、と。

14. 剛勇ダグラス、駿馬に跨り、輩下の真っ先に立ちて進む。彼が甲冑燃えて輝く様、おこれる炭<sup>たん</sup>の如し。彼にまさる勇武の武者はなかりき。

15. 汝らいずれの者なるや、とダグラス問いぬ。又いずれの輩下なるや、と。このチェビオットが狩り場に誰が狩りの許しを与えしぞ。余が家来、はた余をも侮るかや、と。

16. これに真っ先に答えしは、雄々しきパーシーの殿なり。我らいずれの者なるか、はたいずれの輩下なるか、汝には告げまじ。我らここ、この狩り場にて狩りせん。汝の輩下、はた汝また何するものぞ。

17. チェビオットが四方に、太りまされる赤鹿が牡仕留め、獲物もて引き揚げん所存なり、と。剛勇ダグラス応じて言う。さらばこの為め、我らがうちいづれかひとり、この日命落とさんまこと止むを得ずや、と。

18. ついで剛勇ダグラス、パーシーの殿に向かいて言う。居合わせたる罪無き人らの命奪うはまことに心痛み、口惜しきことなれ。

19. されどパーシーよ、汝は領主なり。余もまた任国<sup>くに</sup>にては大守<sup>11</sup>と呼ばれる身。我らが輩下共に脇へと退かせ、汝と余の一騎討ちは如何にや、と。

20. それこそ我も望むところ、とパーシーの殿応じ給いぬ。それ拒む者にキリストが天罰の下らんことを願うなり。まこと剛勇ダグラスよ、汝を拒むが如き目には断じて会わずまじ。

21. イングランドにもスコットランドにも、はた又フランスにも、女より生まれし者なれば何人といえど、余、運命巡り来たらば、一対一、必ずや恐れず立ち向かわん、と。

22. その時、その名をリチャード・ウィドリントンなるノーサンバランドの従

者、声挙げて言う。かかる事、南イングランドなる主ヘンリー四世<sup>12</sup>が耳に達すれば恥辱なり。

23. 御両所共にやんごとなき君ら。我は土地の名もなき従者なることは承知す。我らが旗頭の野に戦う姿、ただ立ちてうち眺むるは断じて潔しとせず。我に得物振るう力あるうちは、勇気も技も共に衰うることを許すまじ、と。

24. ああ、かの日、かの日、かの日は慄きの日なりき。我、第一篇をここにて終らん。チェビオットが狩りの物語に、なお耳拝借願えれば、これより続き語らん。

25. イングランド勢、弓引き絞りぬ。彼らが心勇壮にして恐れ知らず。先ず放ちたる矢もて槍兵百と四十を<sup>たが</sup>殲したり。

26. されど大守ダグラス、戦の野に留まりぬ。まこと勇武の旗頭なれ。これ、大守が敵を散々討ち悩ませし事にてもまこと明らかなりき。

27. ダグラス、軍勢を三手に分く。これぞ天晴れ、誇り失わぬ総大将なり。強き木もて造りたる頼もしき槍構えて、軍勢四面より襲い來たりぬ。

28. 我がイングランドが弓勢、彼らが為め数々の深き痛手を四方に蒙わり、剛勇の士数多その命を落としぬ。されどこは仇が栄光とはならざりき。

29. イングランド勢、弓捨て、輝く<sup>つるぎ</sup>劔抜き放ちたり。きらめく刃、鋼の冑に振り降ろさる様、見る者の心を痛ましむ。

30. めでたき造りの甲冑も籠手もたまらず、忽ち武者多く斬り倒され、いと気高き武人いくたりも、その場の足下に倒れ伏しぬ。

31. ダグラスとパーシー、流石大力無双の旗頭、ようやく向かい合いぬ。秀れしミラノ鋼の刃合わすこと幾度か、両者膚に汗を生じたり。

32. 勇武なるこの<sup>もののふ</sup>武人ら、意気なお衰えず戦いて、ついには鋼の冑より血潮の吹き出づる様、さながら雨か霜に譬うべし。

33. パーシーよ、余が軍門に降れ、とダグラス声をかけぬ。されば大守の扶持、我らがスコットランド王ジェームズの君<sup>13</sup>より授けられん処へ汝を連れ行かん、疑うなかれ、

34. 汝に多大の身代金与えん。この場にて余、これを汝に約するものなり。戦

の野にありて余の倒せし相手にして、汝にまさりて勇ましきは知らざるが故なり、と。

35. 否、とパーシーの殿の申されぬ。先に汝に申したる様、余、女より生まれし者に屈することあらじ、と。

36. 言うより早く突如、一本の矢、さる強弓より飛び来たりぬ。そは大守ダグラスが胸板貫きて刺さりたり。

37. 鋭き矢、肝と肺、共に刺し貫きて、息あるうちに大守洩らせし言葉は只ひとつ、そを残して息絶えぬ。即ち、余が家臣らよ、戦え、力の限り。我が生命尽きたり、と。

38. パーシー己が劔に倚り懸り、ダグラスが最期を見届けぬ。死せる仇の手とりて申されぬ。汝の死に、我が心痛む、

39. 汝が生命救わん為なら、我が領土三年が間手離せしものを。此の北の国うち広しといえど、勇氣はた技、汝にまさる者の居らざりしに、と。

40. その場の様子仔細に見てとりしスコットランドの騎士ひとり、その名はヒュー・モンゴメリー卿。彼、ダグラスの命落するを見て、槍一振、恃む<sup>ひと</sup>木一本、を手に握みぬ。

41. 彼、軍馬を御して、百の弓勢もものかわ、間を突き貫きて留まるも止まるもさらに知らず、パーシーが殿目指して駆け寄りぬ。

42. 彼、峻烈の一撃パーシーが殿に加う。堅固なる木の恃みとせし槍もて彼、パーシーが身をば鮮やかに貫き通しぬ。

43. その穂先突き抜け、三尺を十二分が程に余して先へ出づる様見えたり。キリスト教が世に、この日果てし二人にまさる旗頭のなかりし。

44. ノーサンバランドに出づる弓兵ひとり、パーシーが殿落命さるを見ぬ。彼、手に弓引き絞りに持ちぬ。

45. 長さ三尺余の大矢、堅き鋼の矢尻まで引き絞りぬ。強激、霜烈の一撃、ヒュー・モンゴメリー卿が上に見舞いたり。

46. ヒュー・モンゴメリー卿が上に彼が見舞いし一撃、強激、霜烈なりき。彼が矢羽根の白鳥が羽毛、卿が心臓の血潮に濡れぬ。

47. 一步たりとも退く者なし、激戦の裡に踏み留まり、その力の続かん限り、数多の劔振いて互いに切り結びたり。

48. チェビオットにこの戦の始まりしは正午に半刻前、されど晩祷の鐘鳴るに及ぶも、戦いなお半ばに至らず。

49. 月明り頼りて双方、銘々に陣揃えす。チェビオットが高き丘に、已れ支うる脚の力失せし者数多なり。

50. イングランドが千五百の弓勢、うち帰りし者は只七十と三、スコットランドが二千の槍兵、これ又まさに五十と五に過ぎず。

51. されどチェビオットが丘のうちに、皆斃れ、丈高く立つ力失いぬ。未だ世に生まれざる人の子の、それを悲しむもむべなるが、今更ながら口惜しき事にこそ。

52. パーシーが殿の跡追いて斃れし者に、ハガストンのジョン卿、名門ハーレーのロジャ卿、豪雄ヘロンのウィリアム卿。

53. 高名の騎士、勇武なるラムレーのジョージ卿、豪族レィビーのレイフ卿も槍の穂先に落命しぬ。

54. ウィドリントンが命果てし次第に我が心痛みぬ。両の脚ふたつに斬らるもなお、膝つき体起こして戦いたり。

55. 剛勇ダグラスが跡追いて斃れし者、モンゴメリーのヒュー卿、はた彼が姉妹の子、勇武の働きせしデイビー・ラムウエル卿。

56. 一行がうち、マレーのチャールズ卿、一步も退かず。領主なりしヒュ・マックスウエル卿、ダグラスと共に死せり。

57. かくて夜の明くるや、薄墨色の樺、榛の柩の作られぬ。寡婦数多、流る涙と共に、連れ合いし者引き取らんと訪れたり。

58. テビオットが谷悲しみを唱い、ノーサンバランドの地いたく嘆き脚つもよし、されどそこ辺境の地に命果てしかの旗頭二人に肩並ぶ者の再び世に出づること、絶えて無からん。

59. エジンバラなるスコットランド王ジェームズが許へ、王の名代、辺境候剛勇ダグラス、チェビオットがうちに命果てし悲報の届きぬ。

60. 王その手を鞭に責め腫らし、様<sup>も</sup>みしだきて、嗚呼、悲しきかな、まことダ

グラスにまさる旗頭、スコットランドがうちに、再び出づることなからん、と嘆きぬ。

61. 麗しきロンドンにいますわれらが王、ヘンリー四世が許に、王の名代、辺境侯パーシーが殿、チェビオットがうちに命果てし悲報の届きぬ。

62. 神、御意<sup>みこころ</sup>に適わば、パーシーが霊の上に憐れみ垂れ給えかし、とヘンリー王は叫びぬ。イングランドに、パーシーにまさるとも劣らぬ旗頭数多あり。されどパーシー、汝が死は、余の生きてあらば、必ず存分に酬わん、と誓いぬ。

63. 我らが高潔なる王の誓い給いし如く、流石に令名高き君主なり、彼、パーシーが死を償わんとホミルドンに戦起こしけるが<sup>14</sup>、

64. そこにてはスコットランド騎士三十と六人、一日に討ち斃されぬ。グレンの河の谷<sup>15</sup>、彼らが光る甲冑に、砦、塔楼はた町もあまねく煌きたり。

65. かく、かのチェビオットが狩<sup>かり</sup>猟なされ、その故にこそ騒乱のそこに起こりしなり。この地熟知せる故老、そをオタバーンの戦い<sup>16</sup>とは名付く。

66. オタバーンにこの騒乱始まりしは月曜のこと。剛勇ダグラスそこに斃れ、パーシーその地より立ち去ることはなかりき。

67. ダグラス、パーシー相見えし時より、この辺境の地に、赤き血潮の流ること、雨の通りを流るるに似たりといえども、不思議ならざる日は無かりき。

68. イエス・キリスト、我らが不倖せ癒し給い、この身を至福に導き給わんことを願う。チェビオットが狩<sup>かり</sup>猟はかく終りぬ。神、我らになべて倖せなる最期を許し給わらんことを願うなり。

注1. *Chevy Chase* なる名で一般に知られる。

2. ただしAddisonが接したのは、十六・七世紀のversionである。これはChildではB version、Percyでは*Modern Ballad of Chevy Chase*と題されている。なおChevyはCheviotの語尾が訛ったもの。

3. 例えばLegouis et Cazamianの共著では三頁が充てられている。

4. 大阪外国語大学口承文芸研究会「世界口承文芸研究」(昭和54年3月31日発行)に収載。



5. Northumberland はイングランド北端の州、スコットランドの Roxburgh, Berwick 両州に境を接する。
6. Cheviot Hills のこと。Northumberland と Roxburgh 両州の境をなし、56 キロに及び大体なだらかな丘陵。Cheviot Hill (2,676 ft) が最高峰、現在牧羊で有名。
7. Bamburgh は Northumbria 海岸の地名。Farne Islands を海上に臨む。
8. Bamburgh, Norham, Lindisfarne のこととされている。
9. Tweed はスコットランドとイングランドの国境にほぼ沿って流れ、北海に注ぐ。
10. Teviotdale は南スコットランド Roxburgh 州の Teviot 河の谷間。Teviot は Tweed に合流する。
11. earl のこと。
12. Henry IV (1367 - 1413 ; 在位 1399 - 1413) はランカスター王朝の始祖。在位中、北部 Northumberland のパーシー門の監視に気を配り、1402 年、後出 63 節の Homildon の対スコットランド戦にはその支援をとりつけたが、論功行賞に不満をもったパーシー門はやがて離反する。
13. James I (1394 - 1437 ; 在位 1406 - 1437) は 1406 - 1423 の間、イングランドに捕えられていた。
14. Northumberland の Homildon Hill の近くであった戦いで、1402 年 9 月 Henry Percy Hotspur 率いるイングランド軍が Douglas 率いるスコットランド軍を破って、そのイングランド侵略の仇討ちをした。当時のスコットランド王は Robert III。
15. Cheviot 山中に発し、Tweed 河に注ぐ河の流域名。Northumberland の既出 Homildon Hill も遠くない。
16. 1388 年、Henry Percy (Hotspur) の大軍が小勢のスコットランド軍を率いる Douglas に破れた戦い。これは *The Ballad of Otterburn* にも歌われている。